

☆私の意見

# 開港120年祭を

## みなとの

## ルネッサンスに

松浦 勢一

△神戸市港湾局長▽



港湾の技術革新は、日進月歩です。だから、あまり先のビジョンは、なかなか描きにくいところがあります。現在、神戸市では、昭和七十年までの港湾を考える、「神戸ポートルネッサンス」と称した、港湾計画を策定しております。

明治時代に造られた埠頭が、昭和40年代からのコンテナ化の急ピッチな進展により、時代のニーズに合わなくなってきたおり、今や港の再開発が焦眉の問題となってきました。港湾の新規開発と既存施設の再開発を同時に進める、そういった意味で「ルネッサンス」という言葉を使っています。また、これまでの港湾は、どうしても物流が中心になり、ともすると、市民との関わりあいや、港湾文化などの面では、立ち遅れていた感がありました。これからは、単に貨物を追いかけるだけでなく、港湾を観光のポイントにしたり、港湾に関する文化づくりの拠点にしたい。「ルネッサンス」には、そういう思いをも込めているわけです。

今までは、臨港線が市街地と港湾地域とを南北に分断していたために、市民と港が物理的に隔絶されてきました。しかし、この四月には、待望のメリケンパークが完成します。一方では、かつて、ハシケ荷役が行われていたため、港は危険だというイメージがあったのですが、今は、それもなくなり、非常に明るい、カラッとした雰囲気になっています。

横浜では、港と隣接した山下公園が市民の憩いの場として親しまれていますが、神戸のメリケンパークは、それを凌ぐものになると期待しています。

また神戸は、これまでは港湾産業で栄えて来たのですが、これらの企業は、今、厳しい環境におかれています。年来の経済不況で、ややもすると沈滞ムードに陥りますが、この開港一二〇年祭をきっかけに、不況風を一気に吹き飛ばしたいですね。また、これが港の体質改善への、一つのスプリングボードになってくれればと願っております。

(談)



# ★月刊神戸っ子26周年記念文化賞／第16回受賞者発表

## ブルー・メール賞

副賞各拾万円  
新谷琇紀制作  
海の女神ブロンズ像

神戸の新鮮なイメージ創りをつづけて来ました月刊神戸っ子は、この三月号で創刊26周年を迎えました。これもひとえに皆さま方の暖かいご支援の賜と厚くお礼を申しあげます。

小誌は創刊10周年を機に、神戸の文化を推進するために文化賞「ブルー・メール（青い海）賞」を設定いたしました。本年、第16回を迎え、各部門別に選考会を開き、左記5人の方に賞をお贈りすることになりました。副賞には地元企業のご協力により各部門の受賞者に賞金拾万円と記念品（彫刻家新谷琇紀氏による海の女神のブロンズ像）が授与できることとなり、心から感謝の意を表します。

これからも地域社会の中から世界に通じる文化を育みたく、力いっぱい努力してまいりたいと思います。今後ともご支援のほど、よろしくお願いたします。

△授賞式は4月7日（火）午後6時からサンポーホールで行います▽

### □文学部 門

選考委員 島

京子・川端柳太郎・杜山 悠



山西 史子

△作家▽

心の隅にわたかまりながら、今までだれも気づかなかつた母親への怨念が鋭くえくり出されている。しかも、それを書くことによって、作者は母の愛の片鱗を発見し、変身した。作者の生きざまも巻き込んだインインションの物語である。

△川端柳太郎▽

### □音楽部 門

選考委員

柴田 仁・小石 忠男・出谷 啓



中西 覚

△作曲家▽

中西覚氏は作曲家グループ「たにしのか」の中心として活躍され、特に昨秋「中西覚音楽作品展」でも改作発表された「原爆を詠める七つの歌」は感動的なものでした。教育家としての神戸への貢献度も高い人です。

△柴田 仁▽

□美術部門

選考委員

赤根 和生・増田 洋・草野 拓郎



松原 政祐

△画家▽

戦後日本の具象画家は、抽象主義の波にのまれ、かなり重度のコンプレックスに悩んでいたが、近年新世代が美術界に参加し、再び具象画が見直されてきている。松原政祐もその一人。「生命への畏敬と親愛」をテーマに、具象画の魅力をめぐりに魅えらせている。

△増田 洋▽

□舞台芸術部門

選考委員

佐野 漣箕・名生 昭雄・岡田 美代



楠本 喬章

△落語企画▽

あんな、楠本はんいうお人はな、神戸に落語をバラ撒きはったお人や。柳笑亭、笑民寄席、兵庫区民寄席、もとまち寄席、東西落語名人選、中高生の落語鑑賞教室等や。それに喜公、「きろくのきろく―喜六の記録―」いう名前の本もかいてはるで。

△名生 昭雄▽

□ファッション部門

選考委員

福富 芳美・森本 泰好・藤本ハルミ・小泉美喜子



望月 美佐

△書家▽

勤の書、くらしの書など望月さんの感性とエンターティナー性は、他の追随を許さぬ華麗な『書の世界』を創造している。又『文字を着る』と題した昨年の東京・大阪のショーは、ファッションとして世界に『書』が飛翔した。

△小泉美喜子▽

★ブルー・メール賞協賛企業

財団法人 井植記念会 株式会社 大丸神戸店  
 UCC上島珈琲本社 株式会社 太陽神戸銀行  
 オールスタイル㈱ 田崎真珠株式会社  
 神戸地下街株式会社 日本たばこ産業株式会社  
 株式会社 神戸風月堂 株式会社 ノーリツ  
 株式会社 シヤルレ バンドー化学株式会社  
 神栄石野証券株式会社 株式会社 ユーハイム  
 角南商事株式会社 株式会社 ワールド  
 株式会社 そごう神戸店

△社名50音順▽



**Juchheim's**  
The right and often unexpected  
 gifts, Chocolates and More  
 Since 1881



**WHITE DAY**

ちょっと気どってホワイトデー

日ごろの感謝をこめて贈るなら、ちょっぴり紳士を気どって  
 みるのもいいものです。3月14日、ホワイトデーをお忘れなく。

ユ-ハイム

# ESCORT DINNER



気持ちを言葉で伝えるのは  
 むづかしいけれどテー  
 プルをはさんで向  
 かいあえば、笑顔  
 がこぼれて  
 きます。

2/13fri. ...▷ 3/15sun.

スカイレストラン・エリートセブン・ステーキハウス・  
 コモ・石庭・白扇・海風飯店・六甲オリエンタルホテル  
 スカイレストランで実施中です。

女性だけにプレゼント

期間中、エスコートディナーをご利用の女性に、  
 素敵なプレゼントを  
 もれなくさしあげます。

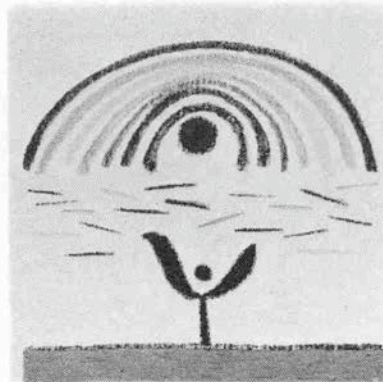


**オリエンタルホテル**

神戸市中央区京町25 ☎(078) 331-8111



# 随 想



絵/立岡 佐智央

## 将来の神戸への道

直木 太一郎

△神戸倉庫相談役▽



西向け神戸。そこに播州平野あり淡路島がある。

つまらない私の乏しい経験だから言えば、これまで関西を一つとして計画されて行なわれたものにうまく成功したものは一つもない。戦後すべてが東京へ集中されるのを見て、それを防ぐため首都圏に対し、関西として京阪神の都制や三府県を合併した道州制が提議されたが、しりぞけ

られ阪神ポートオーソリティももうまくゆかなかったが、これは行政の壁が厚かったからである。関西という名のつくものでうまくいっているのはあまり見当らない。

関西新空港はどうであろうか。これもすでに大阪空港存続の声も出ているが、そうなるとその意義は半減して前途も余り芳ばしくない。

現在首都圏は、ほぼ一色に塗りつぶされて浜っ子の影も薄くなっているが、こちらでは京阪神の三色ははっきりと対峙している。

そうなるとそれは京阪神それぞれ都市に住む人々の質がちがうのが原因であるから

神戸もこれからは独立独歩を覚悟しなければならぬ。

一時いわれていた、六甲山文化を甦らせて広く西に拡大し、播州平野に神戸の空港を設け、淡路島をその楽園とする新しい神戸の都市計画が必要となる。ここは沿岸地帯を除くと公害の最も少ない地域であり、同じ県門であるから行政の壁も余りなく実現可能である。そうなると、ともかく東京へ大阪へと東に向きやすい神戸の人々の目をもっと西へ向けなければならぬ。創立二六年を迎える「神戸っ子」も、新しい使命も自覚して創立当初同様の清新の気の張る編集を続けてほしい。

## 母なる愛に

### 祈りをこめて

宮崎 三千子

△画家▽



神戸に生まれ、神戸に育った神戸っ子。

そんな私が神戸を愛し、神戸に住んで思うこと。"母な

る海と山に恵まれ、空の明る  
い神戸は、今、文化の華の魁と  
なる時ではないでしょうか。

あのアフリカ大草原に育ま  
れてぬくぬくと繁殖した象、  
その他多くの動物たちの足跡  
は、今砂漠……。

我が国をも含め、今世紀の  
経済戦争を勝ち抜いた人々  
が、彼等の子供たちに与えた、  
ぬくぬくと見える環境は、ま  
るで心の砂漠……余りにも  
物質的に貪欲で背筋が凍る思  
いです。ごく普通の結婚をし、  
同時に主人の両親と同居した  
「奥様は魔女でした」と言ひ  
たいところですが、そうはい  
きません。御想像にお任せし  
ます。

さて子供たちが大きくなる  
につれて、マスコミ乱過、教  
育産業の生産地獄等次々に時  
代の渦に吞まれて行くのを、  
手をこまねいてはいられませ  
ん。魔女ならぬ身の悲しさ、  
ウイנק一つじゃどうにもな  
らないわ。

それにつけても、義母はも  
う八五才、何分気丈な明治の  
女なれど身は病を気にするお  
ぼつかなき、それでも我が子

を思い庇う様は、未だに目に  
入れても痛くないらしく、全  
く尊敬脱帽の他ありません。

しかし、我々ほもつと広い母  
なる愛を、今わが子を通して  
世界に向けなければならぬ  
時だと思えます。あらゆる経  
済戦争、宗教戦争が、弱者や  
子供たちを、もうこれ以上犠  
牲にしてはなりません。

大いなる母の慈愛が、天に  
届き地を覆うよう、精魂込め  
た祈りで絵を描きたいのです  
私が生活の片手間に描いた  
小作品を、作品集(一)「心」と  
して出版しました。その中の  
冒頭の詩画に「心」と言う一  
編があります。

人はよく道に迷うもの、そ  
んな時、何故か徳兵衛さんと  
言う最も日本的な名の神様ら  
しき人との対話です。

徳兵衛さんや徳兵衛さんや  
今見たものは夢かいな  
何で夢なもんかいな  
夢の中にも現があつて  
現の中にも夢がある

徳兵衛さんや徳兵衛さんや  
今聞いたことは嘘かいな

何で嘘なもんかいな  
嘘の中にも誠があつて  
嘘の中にも嘘がある

徳兵衛さんや徳兵衛さんや  
今あつたことは幻かいな  
何で幻なもんかいな  
幻の中にも真実があつて  
真実の中にも幻がある

泥んこ

I LOVE KOBE

立岡 佐智史

△画家△

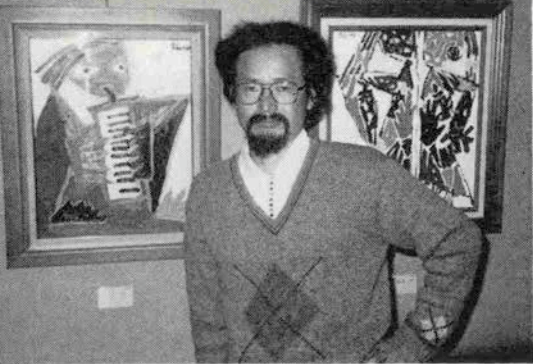
「そりゃ、自然と直に向き合  
うって厳しいです。雨が降っ  
たら降ったでひと仕事、風吹  
いたら吹いたでおちおち寝て  
もいられない、自然ってのは  
生みもするし殺しもするんで  
すよ。たとえ草なんかほつ  
ておけば家の中だろうとお屋  
根の上だろうとお構いなしに  
根を降すし、北国でいえば雪  
みたいなもの、5、6月頃の  
草の勢いときたら、ミドリ  
の雪”っていう位あつという  
間に道だつて何だつて消して  
ゆくんだから。

一番強いのがやっぱり植物で  
しょうね。みんな土にしちゃ

いますから。

まあとにかくアトリエ捜してこの山懐の我愛すべき水車小屋に辿り着いたんだけど、同じ神戸でもずいぶん違うね、ここは。え、シンブン？テレビ？もう11年になるかな、見なくなっただけ。初めの数年は畑ばかり耕やしてたね。

それまで街中で夜昼はつきりしない生活だったでしょ。ここに来たころ毎日朝が待ちどおしくてね。ポロ屋のトタンの板のツブツブ穴を通して朝日がサァーと射し込むんですね。無数の光のシャワーになってね。それは美しいものでした。そして朝から晩まで畑ばかりしてた、その頃。畑で馬



海文堂ギャラリーの個展にて

鈴薯なんか穫れると、もうメチャクチャうれしくてね。メークインだったけれど美しくてね、黄金色なんですまるで。

真ッ暗けの土の中からほんとうに黄金がザックザク出てきたんだって錯覚する程ですよ。そんな時はひとりでも小躍りしたもんです。ばかみたいな話だけれどすっかりうれしくてね、ひと鍬掘るたんびに胸ドキドキですからね。このとれたてを丸茹でにして食べるとそれが又おいしいもの。

ぽっかり割ってフウフウいながらバターとか塩つけてね。そして、思いましたね、子どもたちに本当に伝えなきゃいけないのはこの感激だなあ、ってね。この「イモの味」さえわかりや、他はどうだっ

ていいや、ってパクパクやりながら思ったものですよ。冬になるとマキ採りです。ダルマストーブだから寒けりやヤマからマキ採ってくるしかないというしくみ。

たいがいマキ割りなんかしているうちに体がポカポカしてくるんですがね。そしてね、山の水を飲み、裸の炎に

手をかざし、うずくまってね、土にまみれていると、10年程たちましてね、急に、両の足で踏みしめている自分の足元見て、「こりゃ俺ソの大地だあ」ってワァって叫びたいような気持ちになりましたね。それからですね。自然の恵みだなあって、しみじみと噛みしめながら自分の絵に水だとか火だとか、ほんとうの生命だとか求めだしたのは……。

それからうれしくて犬のフクスケ連れて月英(妻)と家から埼玉まで歩いて行きましたね。700<sup>+</sup>ばかり歩きました。その旅から帰ってからかなあ、自分の住んでる神戸っていう「場」が気になりましたのは。これはね、決して地元感なんていうものじゃ全然ないんですよ。ちょうどKOBETというハタケでね、ころころ穫れた芋ッコの一枚がポクっていう感じ、に近くてね。まだ泥ンコの芋ッコがふりっ

と自分の畑を見たくなっただな、ボクの I LOVE KOBE っていうのは——「多分。」

■絵本「たねのゆめ」立岡佐智央作

あかね書房刊

■絵本「魔女・マジョング」立岡月英作  
福武書店刊





三十年も夫婦でいると、相手の考えていることが、手に取るように判るようになる。ところが、へえー、この人、こんなことを考えているのかと、新しい発見をすることもある。

マニラで三井物産の支店長が誘拐された事件には胸が痛んだ。そんな頃に、私にマニラに行く話を持ち上った。ある女性ばかりの会がマニラで開かれることになったのだ。

政情不安、危険といわれればいわれる程、行きたくなくなってしまふ。私は二つ返事で引き受けた。

夫も、

「行きたければ行ったらいい」

と賛成してくれた。私の心はマニラに飛んでいた。

「主賓演説はアキノ大統領なんだって。きっと素晴らしい会になると思うわ」

私はうっとりしていたが、その時、ハタと気が

□エッセイ

夫、

この不可思議なるもの

田中千佳

（作家）

カット／西村 功

ついた。もしかして、万が一ということもある。

「ねえ、誘拐されたらどうしよう」

私は甘ったれた声を出して、夫の顔をのぞき込んだ。嘘でもいいから、

「すぐに助けに行つてやる」

といつてくれるのを期待していたのだ。

夫は澄した顔をして、

「ゲリラ側に、折角誘拐なさったのですから、多少年は取っておりますが、そちらで存分に御処置下さい。返していきませんと返事するねえ」

といった。何ですって？ 私は耳を疑ったが、

夫は更に続けた。

「テレビや新聞がインタビューに来たら、『誘拐される度に高額のお金を払っていたのでは癖になります。誘拐が合わない仕事だと犯人側に思い知らせるために、私は妻をあきらめます。妻よ、世界平和を願つて、安らかに死んでくれ』ていい



て、涙を一粟流すんだ。途端に俺は世界のヒーローだね。フッフッ」

夫は嬉しそうに笑った。口措しさの余り、私は夫を振りまくった。

恥かし乍ら私は作家のはしくれだ。書かなければならないのに、家にいると電話は鳴るし、訪問客はあるしで机に向っていられない。

「あー、もう嫌、この家にいたら何も書けない。作家としての私はこのまま消滅してしまおう」少し大げさにぼやいてみた。それまで新聞を読んでいた夫は顔を上げると、

「田舎に小さな小屋を建ててやろうか。あそこなら、一日にバスが二度しか通らん所だから、誰も来んぞ」といった。

私は嬉しかった。たとえ小屋でも、私の小説が書けるように建ててやろうなんて、やっぱりこの人は優しいんだ。夫の田舎は島で過疎地だから、私の仕事も渉るに違いない。

私はすぐに友達に電話して自慢した。「彼って心の底から私のことを思ってくれてるのよ。羨しいでしょ」

しかし、友達は冷静だった。「それじゃあ、姨捨山じゃないの。あなたを田舎へ追いやって、その留守に悪いことするつもりなのよ、きつと」

何と根性のひねくれた人か。私が夫に大切にされているのを知っていて、ひがんでいるのだ。あわれな人だと私は友達を軽蔑した。

ところが、その話を聞いた夫は、

「さすが読みが深いねえ。俺の本心バレてしまっただか」

と、ニヤニヤ笑った。私は、又、夫を振りまくった。

以前から、私はどうも夫がヘソクリを持っているらしいと気付いていた。給料は銀行振込みだから、みんな私の手に入っている。だが、何となく匂うのだ。

しかし、私はしみつけた男は嫌いだから、夫が外でエエ恰好するためには多少のことは仕方がないだろうと思っていた。

先日、知らない銀行から電話がかかってきた。「まとまった額の普通預金がありますが、勿体ないですから、定期にして頂けないでしょうか」私はさりげなく残額を確かめてみた。

「〇百×拾万円です」

へえー、あの人が私に黙ってこの金額。それは、ちょっと驚く程の額だった。よし、帰って来たらとちめてやろう。私は手ぐすね引いて待っていた。

銀行から電話があったことを聞いた夫は微動だにせず、

「端金だ。放っておいたらよろしい」といった。その声の厳しさと勢いに吞まれて、私は何もい出せなかった。

二、三万の金にピーピーしている筈の夫が〇百×拾万円を端金とは――

ああ、夫、この不可思議なるもの。しかし、面白くて離れるわけにはいかない。

# フワーツと、 ボヤーツと……

中村茂隆

神戸大学教育学部教授



神戸は文化不毛の地——と昔よく言われた。今でもそれを口にする人に出くわすことがある。このテの人がいう「文化」とはいったい何なのだろうか。それは恐らく劇場や美術館へせせと出かけてゆくことであり、一向にその方へ足を向けもしないし、いいものを与えてやっつても食いついて来ないというのが「文化不毛」の状態なのだろう。もう一言付け加えると、この人達のいう「いいもの」とは中央が購立してくる立派なメニユーのことであり、学芸会風地狂言など、この人達の眼中にないことは確かである。

ところで、神戸ほど景色のいい、食べ物のおいしい、暑さ寒さもほどほどの土地というものは世界中探してもそうそうあるものではないと私は独断的に考えている。そして、こういう土地に住んでみると、殊更に「文化」など求めなくても「オモロイこと他にぎょうさんある」わけだが、ワケ知りの人によると、これがまたよくないのだそうで、「文化」が成熟するためには環境がハンゲリーでなければならぬとおっしゃる。しかし私自身は暇さえあればボヤーツとしているのが好きなので、ハンゲリーになりようのない神戸のフワーツとした土地柄を結構気に入っている。さらにこういう環境の中でなおかつ劇場や美術館へもせせと出掛けてゆく神戸の人達に深い畏敬の念をもっている（ことわっておくが私自身、神戸生まれの神戸育ちである）。

とかなんとか言いもって、あんたも何や知らんが結構チョコマカとようやっつとってやないか——とひとからよく言われるが、私にとってはなりわいである大学の先生をマジメにやっつてゆくこと自体、大変努力の要ることなので、ほんとうは暇さえあれば寝ていたいのだが、面白そうな企画が持ち込まれればついノってしまいう好奇心の強さ、頼まれれば断れない気の弱さ・優しさのために、つねに後悔と自己嫌悪にさいなまれながらも、やればやっつたで何か楽しいことがあり、少しは賢くなったような気もするので（私だって賢くなりたいたい）ズルズルとやっている次第である。要するに学芸会風地狂言なのであり、ギンギラギンに意地をはって「地元文化向上のために」やっているわけではない。（そんなオコガマシイ気持ちはさらさららない）。

こういう次第で、性来怠惰のために、ひとから機会や課題を与えられてアップアップしながらやっつているのが実情だが、時には自前の仕事もある。ただ、これがいつも後回しになってしまふ。

「信太妻（しのだづま）」というオペラの場合も、歌舞伎や人形浄瑠璃で有名な信太の狐・葛の葉の子別れを扱った、かたおか・しろうさんの同名のひとり芝居が気に入って「これをオペラにしたい！」と思ってから実現するまでに十年かかっている。その間構想を温めていたと言えればカッコいいのだが、ズルズル後回しになってし



瀬野光子さんの「信太妻」(昭和60年10月大阪公演)／神戸新聞社提供

大阪の場合もそうだったが、私は狭く限られたクラシック音楽愛好家の領域で、お客の取り合いをするという不毛な行為は避けたいとつねづね思っている。前日も歌舞伎や人形浄瑠璃としてはよく知っているが、それがオペラではどうなののかと、興味をもってきて下さった年輩の方々、いったいオペラって何やらかという全くの門外漢の人々に声をかけた結果、立ち見が出

るほどの満員になり、かえって迷惑をかけてしまったが、そういう方々の新鮮な意見・感想が、今回再演する際の貴重な反省資料となっている。もちろん専門家や通の人達の評価に堪え得るものに仕上げるよう努力していることは言うまでもない。

ほれほれ、結構ムキになってやっとうやんか、やっばり根はマジメなんやでーといわれそうである。でも暇さえあったらボヤーンとしていたいーやっばり、これがホシネです。

#### 〈筆者紹介〉

神戸大学教育学部教授。作曲家。

最近作はオペラ「信太妻」のほか、創作舞踊「紅い雪」の音楽、合唱組曲「光れ中学生」「おーい春」などがある。著書は「はな唄と交響曲と」(神戸新聞出版センター)

まい、「いったい、いつになったら作曲する気やねん」と業を煮やしたかたおかさんがブリマドシナの瀬野光子さんを説き伏せ、劇場を確保し、私を追い詰めてくれたお陰で、やっと一昨年の十月、大阪で初演することができた。その年の大阪文化祭で賞をいただき、今度は神戸市民文化振興財団のお骨折りで、今年の十二月一日・二日、神戸文化ホールで再演されることになった。

同じ神戸でやるなら神戸の人達の手で実現したいと私は考えた。結果、演出の茂山千之丞氏とスタッフの一部以外九割がた神戸市・兵庫県在住者の手による公演が実現することになった。特に合唱はお母さんコーラスの方に協力していただくことになっている。先に私は学芸会風地狂言と言ったが、それは地元の専門家達も含めて身近な人々が舞台にのっているという親近感と、手作りの温かさを大事にしたい気持ちの表現であり、決して茶化して言っているのではない。



## ☆出会いの旅

# 不思議なる世界に 目に見えぬ 念力の出逢い



角卓

甲南女子大学教授・画家

私はその時々の出逢いをとでも大切に、今日まで生きてきた。たまには思わぬ悪き条件のものもあったが、殆どすばらしい出逢いばかりと解釈して今日の人生を築けた喜びを、しかと体でうけとめている。

この度のフランス展には2つのポイントをおいていた。1つには長い間の芸術至上からの友情であり師でもあるP・アイズブリーと作品を通しての語らいを。2つには角自身の仕事を伝統ある国の人々によって、どのような評価(うけとめ)をしてくれるのか。即ち日本の伝統の見地から今後の勉強の道しるべを発見したいためと念じて。

フランス展は前々から準備研究し、特に東洋の伝統の中で風土的空間性と色彩とのからまりを考え試行錯誤しながらかきにかいた60余点をひっさげての発表。準備が大変なことは言語では語りつくせぬ問題があったが、それもこれも又新しい出逢いの喜びの出来事で、今にしてみれば楽しかった想いしか残らず、さわやかなものでもあった。

多くの人々に支えられ、特にフランス在日本大使はじめ、日仏文化協会会長、ヨーロッパ芸術アカデミー会長、エールフランスの方々、ニース市長、アンティーズ市長、美術館長、ニース大学芸術担当教授、シラクフランス首相、フランス文化大臣他。6年前は肝臓病でとても制作出来る状態ではなかった肉体を、東京の鈴木先生により

人生を一変させてくださるような導きを得て、この大業なる催が出来たものです。病気という出逢いが私には大きな価値として存在した。

こうして書いていくと何も抵抗なくスムーズに事が運んだように見えるが、ニースに於ける会場が二転三転で一困ったが MERIDIEN という大きな会場が市から提供され、むしろ二転三転の結果良き方向に展開した。オープニングパーティには300人の人の渦、祝詞の来賓の方々の挨拶。私も前日に練習して仕上げたフランス語での挨拶。汗顔のいたり甚だしくも、日本マルセイユ総領事がなくさめのおほめの言葉。無我夢中でセレモニーは終ったが、日本から持参した灘銘酒剣菱、我が日本の味、酒を味ってもらい日本の良き物の心を話しました。決して作品は満足いくものではないが、参会者一同絵の内容と色彩についての質問が集中、密教的観えざる世界の展開においての「朱と緑」の交錯する作品に魅入って讚詞。

翌日は、はれてテレビに出演、我が伝統美について。私は讃岐、空海の地で生をうけその密教について話を。作品の上に制作していることを強調するもテレビ故その反応は判らぬものの帰国後取寄せたビデオを見ながら、これも我が人生に大いなるものを与えられたと観喜している。新聞にも大きく取扱われて自分の能力以上の評価に全くいたみいった。



モンズー公園乗馬風景/水彩(上)パリの展覧会場にて(右上)ヨーロッパ芸術文化アカデミー会長・ダガジオ女史と(右下)

会期中、巨匠P・アイズペリーご夫妻がご来場下さり「私も日本と似かよった風土(バスク地方)で生れ、日本の色彩の豊かさにひかれ度々日本に足を運んだのもそこにある」と語る。

9月はじめ、サン・マキシムにある先生の南仏のアトリエに伺ったが、広大な敷地に孫も含め10数人の大歓迎。すばらしい環境、日本の秋田、青森の民芸の、ぼりちようちんが、天井高いアトリエに飾られ私にしきりとそれを強調してみせられ、私としては全く逆輸入のような日本美再発見。

10月には、パリのアトリエに招かれ、フランス料理での歓談。日本公使刈田様、たまたまパリの街角での出逢い。伊藤誠様(姫路美術館副館長)と共にその場ですばらしい物を発見させてくださった。私が孫娘(パリ大学生)に持参した振袖の着物のご披露をかねての華やかなパーティ。

23年前初渡欧した時の出逢いアイズペリー師のご縁は、私にとって最大の師であり多くも教えて下さった恩人。ラフな作風の中にきびしい空間の計算された制作、日本人にも愛好者が多く親しまれている。

ここでもう1人、D. Agg Ajio 女史、ヨーロッパアカデミー芸術文化会長との出逢い。アンティヴ美術館での開催もこの方が取りしきって下さり、日本に帰国前日、パリのホテルに來られニューヨーク・メキシコ・フランスと総括的に私の作品を展覧会をしたいとの申入れ、さらにアカデミーの最高の称号までいただき、来年1月の来日を約束をして、神戸での再会をたのしみに胸ふくらむ思い。我が日本精神を造型し発表することに、アトリエで関わっている最中です。

▲筆者紹介▼

1956(昭和32)年 光風会展特別賞受賞、日展特選(岡田賞受賞)  
1963(昭和38)年 初めての渡欧で、フランスD. AIZPURIに師事。以降1976(昭和51)年までの間に、4回の渡欧。人体、構成と空間性などについて研究を重ねる。1986(昭和61)年、ニース、アンチープ、パリで日本風土をテーマにした3カ月間もの個展を開催。神戸市東灘区在住。





インタビュアー ● 珈琲飲みながら……

# 自由に自己表現できる 魅力 現代音楽

## 岩崎宇紀さん

ピアノリスト

昭和35年	兵庫	市立	丹波	市立	生まれ
昭和57年	京都	市立	丹波	市立	卒業
昭和59年	京都	府立	西宮	高等学校	音楽科
昭和60年	アノ	コンク	ール	第1回	現代音楽
昭和61年	アン	ン	ン	賞受賞	ピ
Like A	Starting Point	レコード	「Just	発表	

いま「現代音楽」が話題になっている。そして、これに取り組んでいるひとりが岩崎宇紀さん。昨年は、結婚、神戸への移住、レコード出版となにかと多忙のところを垂水のお宅におじゃまし、お話を伺った。

現代音楽に取り組もうと思われたのはどういう動機からでしょうか。

岩崎 大学三回生のとき学年試験の課題曲で、バルトークのエチュードを弾いた時からですね。聴いたことのない和音や響きが新鮮で、ピタッと自分に合うものを感じました。

現代音楽のほうが自己を表現できると、インタビューに答えてらっしゃるのを拝見しましたが、それはどういう意味でしょうか。

岩崎 わりに皆さんがご存知ない曲が多いからでしょうか。だからということもあるし、現代音楽のほうがいかなる解釈が可能だと思えます。たとえば、バッハやモーツァルトっていうと、ある程度演奏方法にも枠があるっていうか伝統があるんですね。その点、私にとって現代音楽のほうで、人が知らない、手がけたことのないことをするという喜びがあります。こうじゃないかなと思っただけではなく、自分の解釈に確信を持って思いつき演奏できるんです。

現代音楽は古典(クラシック)の何を越えようとしているのでしょうか。

岩崎 何でもそうだとは思いますが、ひとはみんな常に新しいものを捜していると思うんです。音楽だけじゃなく絵や彫刻にしても。人のやったことはもう役目を果たしているわけで、何か自分で新しいことを見つけて出すという創造することが真の芸術だと思えます。

現代音楽はこれからどういうふうに変わって行くとお思いですか。

岩崎 この前も現代音楽のコンサートを聴きに行ったんですが、なまいきな言い方ですがどれを聴いても使い古されたもののように感じました。これからはやはり作曲家達の才能の方向にかかってくると思えます。どう変わって行くか、私にもわからないんですが、たとえば百年後、はたして現代音楽と呼ばれているものが古典となり得るかどうかも疑問ですね。いま「古典」と呼ばれているものはそのまま残るだろうし、あるいは「現代音楽の古典」といった形で残るのかもしれない。

現代音楽ときくと「変わったもの」というイメージがあったのですが、先ほど先生のレコードをお聴きして、そのロマンというか美しいメロディが失礼ながら意外でした。ただ、音楽というものは聴いていて楽しいものであるべきだと思うのですが、現代音楽の中にはそうでないものもたくさんあるように思います。

岩崎 まず、最初から頭ごなしに変なものだと決めつけないでほしいですね(笑)。何かおもしろがるというか、変





な音がおもしろい、おかしいと思ってる人が多いみたい。それに私は、必ずしも音楽が楽しくなければいけないとは思っていません。変だった、騒々しかったと思う人も多いだろうし、私自身演奏会へ行って、必ずしもすべてが楽しかったということはありませんよ。

—— どういう作曲家がお好きですか。  
岩崎 まず最初に出会ったということもあって、近代の作曲家バルトークが好きですね。あとバーバー。彼はあまりピアノ曲を残していないんですが、アメリカの作曲家でジャズっぽい粋な作風が気に入ってます。

—— 高校で音楽を教えてらっしゃいますが、何かかわった教育方法もとっていますか。また、今の高校生は音楽に関していかがですか。

岩崎 自分が教育を受けてきたように教えているだけで特別かわった方法はとってないつもりです。今の高校生はみんな、指もものすごく回りますし実によく弾きますよ。ただ、単に弾くというだけで中味がないっていうか、軽いという印象を受けるのも事実ですが。喜怒哀楽

が表に出ないんですね。もう少し個性を出して情感をこめて弾いてほしいという気はしています。

—— 神戸に住んで活動することで、何か感慨をお持ちですか。

岩崎 九月の末に結婚して、それから神戸へ越して来ましたので、まだよくわかりませんね。とにかく静かですよね(笑)。海も山もいっしょに見えるのがうれし。伊丹で生まれて、学校は京都で、神戸へ来てみると洗練されたシャレた街という印象を受けます。逆にものすごく下町もあるし、そういう気どらない雰囲気も好きです。

—— 音楽以外に興味のあることはどんなことでしょうか。  
岩崎 このごろ「主婦する」のが趣味です(笑)。今までただひたすらピアノを弾く生活で、全然家の事をしていなかったものですから。小さいころ母が「ラジオ神戸」(今のラジオ関西)の劇団にいらして、その影響からか芝居を観るのめたいへん好きですね。

—— これからぜひ実現させたいとお考えの企画、試みが何かございますか。

岩崎 比較的皆さんが弾かない、近代及び現代の曲を系統的に集めて、あまり仰々しくない小さなサロンみたいな所で演奏してみたいと考えています。たとえば現代曲ばかりではなくて、パッサカリアが好きなのですからクラシックとかいろいろ組み合わせ、聞いていておもしろいプログラムの企画を実現させたいですね。ただ、費用はかかるし適当な場所がないんです。音響が良くてピアノが良くてという、残念ながら関西というか神戸にはまだありません。文化都市神戸にふさわしいそういう施設がぜひ欲しいと思います。

神戸開港120年祭（4月29日～5月17日）

# 祝／月刊神戸っ子 26周年記念

山から海へわたる  
さわやかな風  
今、21世紀への新しい風が  
エキゾチック神戸から  
世界へ……。



絵／灘本唯人

株式会社 サザエ食品

代表取締役社長

戸島 和博

西宮市上大市四丁目一七一八  
電話（〇七八）五二一六三二三

株式会社 ルックファイブ

代表取締役

村上 健

神戸市長田区西尻池町三一一  
二四  
電話（〇七八）六四一八四五一

三宮センター街連合会

会長 岸野 利男

神戸市中央区三宮町二丁目一〇  
一七  
電話（〇七八）三三一三〇九八

三宮ターミナルビル株式会社

取締役社長

小西 真一

神戸市中央区雲井通八一―二  
電話（〇七八）二九一〇〇五六

元町一番街商店街振興組合

理事長 延原 一松

神戸市中央区元町通二―三一―一  
二  
電話（〇七八）三三一七七八五〇